

明治大学 黒耀石研究センター ニューズレター

No.11

September 2019

Center for Obsidian and Lithic Studies News Letter

新センター長挨拶



中国社会科学院考古研究所にて
(銅像は初代所長夏鼐 Xia Nai 先生)

本年度から明治大学黒耀石研究センター長に就任した石川日出志(文学部・教授)です。現在の主たる研究対象は弥生時代と同時期の東アジア世界ですが、縄文・弥生時代の石器群についても探索を続けています。かつて、当センターが設置される契機となった学術フロンティア推進事業「石器時代における黒耀石採掘鉱山の研究」(2000～2004年度:代表安藤政雄)の構成員でしたので、久しぶりに黒耀石研究と相まみえることになります。

センター本部のある長野県長和町は、日本有数の黒耀石原産地群の一角にあり、旧石器・縄文時代の人類が石器石材を求めて活動した足跡が濃密に残されています。明治大学では、地元岡谷市出身の故・戸沢充則氏(元学長)が主導して八ヶ岳周辺における人類史研究を継続し、それが当センター設立へと繋がりました。1950年代初めの諏訪市茶臼山遺跡の調査に始まり、1980年代初めには南牧村矢出川遺跡群の考古学・古環境学等による総合調査を経て鷹山地区の遺跡群の調査・研究へと継承されました。そして現在は、「ヒト-資源環境系研究」として、人類が黒耀石を含む多様な資源を利・活用して生活を組み上げるダイナミズムに関する研究を推進しています。

私は、考古学・歴史学・文学・民族学・民俗学の協同による国際日本古代学研究クラスターの代表も務めていますが、現在のプロジェクト系研究はいずれも学際性と国際性の実質化が求められています。しかしそれ以上に黒耀石研究センターは、学際性と国際性および地域連携の点で明治大学の各種研究プロジェクト群を先導する役割を担っています。

目次 Contents

- * 新センター長挨拶…………… 1
- * 2019年度組織表…………… 1
- * 2018年度下半期の開催事業報告…………… 2
- * 2019年度上半期の開催事業報告…………… 3

文学部専任教員と研究・知財戦略機構特任教員のほかに、センター員と客員研究員を配置して総合研究を進めていますが、何よりも、地元長和町の各種のご支援を頂いて初めて成り立っていることも強調しなければなりません。

また、周辺の市町村との連携も重ねる必要があります。さらに、研究成果を広く社会還元することが求められています。こうした循環があって初めてセンターの活動の活性化が実現すると思います。ご支援のほど、よろしくお願いいたします。

2019年度 黒耀石研究センター組織表

- ◆センター長 石川 日出志(明治大学文学部教授)
- ◆センター員 (50音順)
 - 小野 昭(元黒耀石研究センター長)
 - 栗島 義明(黒耀石研究センター特任教授)
 - 島田 和高(明治大学博物館)
 - 能城 修一(黒耀石研究センター客員教授)
 - 藤山 龍造(明治大学文学部准教授)
 - 眞島 英壽(黒耀石研究センター特任講師/客員研究員)
 - 矢島 國雄(明治大学名誉教授)
- ◆客員研究員 (50音順)
 - 会田 進(元長野県考古学会会長)
 - 池谷 信之(元沼津市教育委員会)
 - 遠藤 英子(前黒耀石研究センター特別嘱託)
 - 絹川 一徳(かながわ考古学財団)
 - 諏訪間 順(小田原市教育委員会)
 - 大工原 豊(國學院大學文学部兼任講師)
 - 谷畑 美帆(明治大学文学部兼任講師)
 - 堤 隆(御代田町浅間縄文ミュージアム)
 - 中村 由克(下仁田町自然史館)
 - 水澤 教子(長野県立歴史館)
- ◆特別嘱託
 - 須藤 隆司(黒耀石研究センター・長和町)
 - 別所 鮎実(黒耀石研究センター・猿楽町)

2018 年度下半期の開催事業報告

2018 年の下半期にはセンター主催、共催それぞれ 1 回のシンポジウムが開催されたのでその概要を報告する。

「ナイフ・石鏃・磨製石斧—石材資源とその流通—」

2018 年 12 月 8 日に明治大学のリバティタワー 1083 教室にて黒曜石研究センター主催のシンポジウムが開催された。午前と午後で多少の入れ替わりはあったものの、約 150 名にのぼる多数の方々の参加者を数えることとなった。当日の進行は次のとおりであった。

第 I 部は「石材獲得と流通」について赤星純平「日本海を南下する黒曜石(紙上のみ)、池谷信之「海を渡る黒曜石」、絹川一徳「サヌカイトの獲得と石器生産」、馬場伸一郎「下呂石の産出状況と流通」、杉原敏之「西北九州の黒曜石と石器群」の発表があった。列島内での黒曜石だけでなく石器石材の多様な姿が地域的に捉えられること、それぞれの地域で産出する石材の特徴やその産状などが相違することを理解することができた。

第 II 部では「石斧素材の獲得」と題して、中村由克「磨製石斧素材の透閃石岩」、松村和男「群馬県内の蛇紋岩類について」、栗島義明「緑色岩を用いた磨製石斧製作」が発表された。磨製石斧は打製のそれに比べて石材選択に限られ糸魚川周辺の透閃石岩が中部日本に広く流通することが提唱されていたが、同じ石材が群馬県でも産出することが確認され注目された。緑色岩など在地系の石材を用いた大型磨製石斧の製作も各地で確認されつつある。

第 III 部では「石器製作と石材」として、島田和高「ナイフ形石器製作と石材利用」、須藤隆司「旧石器時代初頭の石斧と石材」の発表があった。移動生活を送る旧石器時代の石材獲得の行動や移動領域について興味深い発表がなされた。

旧石器時代から縄文時代に至る多様な石材のうちから、黒曜石・下呂石・サヌカイト・透閃石岩・緑色岩を取り上げ、その産状や加工・獲得方法に始まり、製作技術や製品の流通など多岐、且つ多方面に議論が及んだことから、これまででない広く横断的な議論が叶ったことは大きな成果であった。

(栗島)



シンポジウムの開催風景 2018 年 12 月 8 日

「トチの実加工場」は存在したのか？

—縄文時代の木組遺構とその機能を考える—

2019 年 2 月 9 日に明治大学グローバルフロントにて、近年、話題となっている木組遺構に関するシンポジウムが黒曜石研究センター共催事業として開催された。このシンポジウムは副題の示すとおり「縄文時代の木組遺構とその機能を考える」ことを目的としたものであった。

シンポジウムは二部構成からなり、第一部で縄文時代(江原英「栃木県寺野東遺跡」、中沢道彦・納屋内高史「長野市大清水遺跡の再検討」と平安時代(杉野森純子「平安時代の木組遺構」、奥沢哲也「茨城県栗島遺跡の木組遺構」)の事例報告があり、能城修一・佐々木由香「樹種選択と環境変遷から見た縄文時代の水場遺構」の発表もおこなわれた。第 II 部では「赤山陣屋跡遺跡とトチの実加工」とのタイトルで、トチの実加工場としての評価がされている埼玉県川口市の赤山陣屋跡遺跡に関する研究成果が発表された。ほかに、吉岡卓真・宮内慶介「赤山陣屋跡遺跡の木組遺構と出土土器」、吉川純子「赤山陣屋跡遺跡 トチ塚の再検討」、栗島義明「赤山陣屋跡遺跡の木組遺構を考える」があった。

第 I 部の研究発表では、縄文時代の木組遺構の特徴、特にその構造が明確にされると共に、同様な遺構が平安時代にいたっても存在することから、時代的に限定される遺構ではないことが明らかとなった。また第 II 部の発表では、トチの実加工場と研究者間でも認識されている赤山陣屋跡遺跡の木組遺構が、実は貯水空間と足場空間との構造を有するもので、トチの加工に特化した機能を持つ遺構ではなかった蓋然性のたかいことが指摘された。

今回のシンポジウムは縄文時代に特有とされてきた木組遺構が、単純に「アク抜き施設」として評価することが妥当でないことを示し、縄文時代の多様な空間利用や生業活動についての指摘もなされた有意義なものとなった。

なお、この成果については読売新聞(4月17日朝刊文化面「縄文に木組遺構 再考の動き」)で取り上げられた。(栗島)



シンポジウム開催風景 2019 年 2 月 9 日

2019 年度上半期の開催事業報告

新センター長の長和町表敬訪問

7月12日（金）に石川日出志新黒曜石研究センター長が長和町の羽田健一郎町長を表敬訪問した。石川センター長は午前中に黒曜石研究センターを視察し、その後は、史跡整備に伴う発掘調査が実施されていた星糞峠黒曜石原産地遺跡を見学した。現地では長和町の大竹幸恵さんから、縄文時代後期を中心とした黒曜石採掘の様子を説明していただいた。木立の中に設けられた長大な調査区は深いところで-5m近くにも及び、その壁面には縄文人による地中深くに包蔵された黒曜石の採掘にともなう掘削、削平、廃土など、一連の行為を示す土層の堆積が見事に残されていた(写真参照)。

また、調査区の底面近くには白色の粘土層が厚く堆積しており、その中には漆黒に輝く黒曜石が折り重なるように含まれていた。縄文時代の人々が大地を掘り返しつつ探し求めた黒曜石を目の前に、どのように地表を掘り下げ、粘土層を削って黒曜石を入手したのか、調査を担当されている大竹さんに臨場感を交えて解説していただいた。白色粘土層が数百万年前の火山爆発にともなう火砕流に由来することが明らかになったことも調査の大きな成果であるという。いずれにしても類例の少ない、まさに「縄文鉱山」における採掘の姿を鮮明にイメージすることができたのは幸運であった。

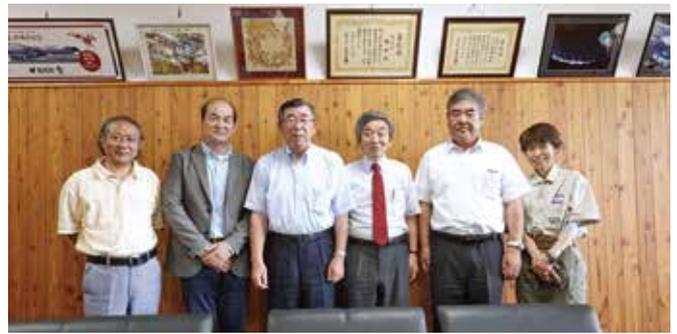
午後3時には現場を離れて羽田長和町町長へのご挨拶の為に役場へと向かった。石川センター長と栗島、そして体験ミュージアムの矢島國雄名誉会長の訪問を、羽田町長と辰野登志男教育長、宮坂和幸課長に出迎えていただいた。石川センター長からは着任の挨拶に続き、黒曜石原産地遺跡の調査や体験ミュージアムでの積極的な取り組みに敬意を表わす言葉と共に、今後も積極的に地域連携を進めてゆくと、明治大学側の基本方針を伝えた。羽田町長からは町にとっての黒曜石の位置づけ、体験ミュージアムでの活動、そして「ふるさと祭り」などの熱心な取り組みについての説明をいただき、明治大学黒曜石研究センターとの変らぬ協力関係を持ってゆきたいとのご意見もうかがうことができた。

(栗島)



調査成果を解説する大竹学芸員

黒曜石の出土状況



長和町表敬訪問 2019年7月12日

明治大学研究者交流支援事業による記念講演会 及びシンポジウムの開催

明治大学研究者交流支援事業で招聘（栗島義明特任教授受入）した釜山大学校の林尚澤教授の講演会が7月28日に開催された。林先生は韓半島新石器時代の集落や生業に関する研究は勿論のこと、黒曜石を始めとした石材資源や海産資源など多角的な研究を推進されている研究の第一人者である。講演では最新の研究成果にふれながら、韓半島新石器時代の集落の変遷及び生業の変化についてお話しいただいた。今回の招聘を機会に、今後、黒曜石研究センターとの連携を視野に入れた相互研究を積極的に進めてゆきたいとのご意見を頂くことができた。

なお、この講演会に合わせて「海峡をつなぐ資源と道具」と題したシンポジウムを黒曜石センター事業として開催した。四方を海で囲まれた日本は、先史時代から様々な資源を内陸部の陸路のみならず海峡を隔てた島嶼部からも確保しており、黒曜石や土器、装身具で用いられた南海産の貝類などに焦点をあてて、その広域的な分布からどのような資源獲得行為や交易活動が遂行されたのかを中心とした研究発表がなされた。

(栗島)

▶ 記念講演会

「韓半島新石器時代集落の展開と生業の変化」

…………… 林 尚澤（大韓民国釜山大学校）

▶ シンポジウム「海峡をつなぐ資源と道具」

● 島嶼部へと渡った縄文人

…………… 栗島義明・別所鮎実（黒曜石研究センター）

● 海上を運ばれた黒曜石—弥生時代を中心に—

…………… 杉山浩平（東京大学大学院総合文化研究科）

● 黒潮とオオツタノハ

…………… 黒住耐二（千葉県立中央博物館）

● 漁撈活動と交易

…………… 樋泉岳二（明治大学文学部兼任講師）

● 海峡をつなぐ土器

…………… 廣瀬雄一（釜山大学校博士課程）



記念講演会 2019年7月28日

「黒耀石サマーフェス in 長和 '19」 第15回黒耀石のふるさと祭りの開催

今回で15回目を数える長和町主催の「黒耀石のふるさと祭り」が8月25日(日)に開催された。当該事業はセンターの共催事業として位置づけられており、今年は栗島と須藤が参加し、日本遺産参加団体のイベント支援や来館者へのセンターの活動紹介などをおこなった。

恒例となった正装した縄文人であるムラ長(羽田町長)の挨拶は好天の青空に響き渡るような元気あふれるもので、参加者の多くが勇気付けられたと同時に、日本遺産関係団体の奇抜な装いや楽しいイベントに多くの親子連れも釘付け状態であった。ブースでのイベントと並行し広場ではジャズオーケストラや縄文の女神コンサートなども開催され、午後からは阿部芳郎センター長による記念講演(「星降る中部高地の縄文世界とは」)も実施された。私も各ブースのイベントに顔を出したり、コンサートを聴いたり、そしてJAによる食のブースで焼きそばを食べ、自宅用に朝採りの高原野菜を購入し、参加者の一人としても祭りを十分に楽しむことのできた1日だった。(栗島)



第15回黒耀石ふるさと祭り 2019年8月25日

開催告知

砂川遺跡

—旧石器時代研究の過去・現在・未来—

日時：2019年11月9日(土) 10:00～17:00

場所：明治大学駿河台校舎グローバルフロント多目的室
参加費無料、資料配付あり

挨拶 …… 石川日出志(明治大学黒耀石研究センター長)

▶記念講演会 10:00～11:15

「旧石器時代研究に於ける砂川遺跡の果たした役割」
…………… 稲田孝司(岡山大学名誉教授)

▶シンポジウム 11:15～15:00

「砂川遺跡—旧石器時代研究の過去・現在・未来—」

- 砂川遺跡とはどんな遺跡であったのか
…………… 飯田茂雄(東京国立博物館)
- 砂川遺跡のブロックと礫群
…………… 鈴木忠司(古代学協会)
- 砂川期とその特徴
…………… 堀 恭介(東京都埋蔵文化財センター)
- 相模野台地における砂川期
…………… 高屋敷飛鳥(神奈川県埋蔵文化財センター)
- 砂川期の移動と石材獲得
…………… 山地雄大・太田千裕・藤山龍造(明治大学)

▶15:20～16:50

- コメント
…野口 淳(NPO南アジア文化遺産センター事務局長)
…………… 栗島義明(明治大学黒耀石研究センター)
- 討論「砂川遺跡を巡る旧石器時代研究」(司会：栗島)
…………… 飯田・鈴木・堀・高屋敷・山地・野口

開催告知

縄文時代早期の環境変遷と人間活動 —東京湾周辺を中心に—

日時：2019年10月12日(土) 10:30～16:30

場所：明治大学駿河台校舎グローバルホール 参加費無料

▶シンポジウム 10:30～15:00

挨拶 …… 石川日出志(明治大学黒耀石研究センター長)

趣旨説明 …… 能城修一(黒耀石研究センター)

- 南関東における縄文時代早期の暦年代と古環境変遷
…………… 工藤雄一郎(学習院女子大学)
- 奥東京湾における縄文海進による海況変遷
…………… 一木絵理(上高津貝塚ふるさと歴史の広場)
- 縄文時代早期の植生変遷と人為生態系
…………… 吉川昌伸(古代の森研究舎)
- 種実・編組製品からみた縄文時代早期の植物資源利用
…………… 佐々木由香
- 縄文時代早期における植物資源管理と生業活動
…………… 能城修一

▶パネルディスカッション 15:20～16:30

明治大学黒耀石研究センターニュースレター 第11号

発行日：2019年9月1日

編集・発行：明治大学黒耀石研究センター
〒386-0601 長野県小県郡長和町大門3670-8
電話：0268-69-0807

黒耀石研究センター猿楽町研究室
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
電話：03-3296-4424
URL:<http://www.meiji.ac.jp/cols/>

印刷：中澤印刷株式会社
〒386-0002 長野県上田市住吉1-6
電話：0268-22-0126



*当センターでは施設の固有名称として「黒耀石」の表記を使用しています。